

川竹和夫先生——一つのプロフィール——

野 崎 茂

国際コミュニケーションの実証的調査研究で、誰しもが余人をもって替えがたい名人級オルガナイザーと認める川竹和夫先生について語るのは、時期尚早のように思われる。現に多くの研究プロジェクトが先生を中心に動いている。先生のお仕事は、今も現在進行形である。したがって、一つの間接報告にならざるをえない、ということをまずご諒承いただきたい。

先生が本学短期大学部教授に着任されたのは1982年4月。その7年前、コミュニケーション研究の国際組織であるIICの大会が京都で開催された。そのころから、先生の国際コミュニケーション研究は形をととのえだした。海外諸国のたくさんのマスコミ研究者との親交を深め、やがて着実に積みあげられる外国研究者との共同研究が構想から具体的な企画へとステップアップしていった。

IICの京都会議をつうじて、各国が連携してメディア・ステレオタイプの研究を進めようという気運が醸成された。国際的なテレビ番組のフロー（流通ないし輸出入）を研究するプロジェクト(ITFP)が結成され、まず日米仏3カ国の共同研究が開始された。日本チームの責任者は川竹先生で、共通のテーマは、自国のテレビ番組の中で相手国がどう描かれているか、そのステレオタイプをお互いに調べあうこととされた。つまり、日本チームは日本のテレビ番組の中でアメリカおよびアメリカ人、フランスおよびフランス人がどんなふうに表示されているかを調べる。アメリカ・チーム、フランス・チームは自国のテレビ番組で日本および日本人がどんなステレオタイプで描かれているか調べる、という3国間の相手国イメージ調査プロジェクトである。

この種の国際共同研究に多くの困難が伴うことは想像に難くない。実証研究だから各国それぞれに研究チームをつくらねばならない。調査方法や分析手法を共通にしなければならない。互いの連絡報告を密にしなければならない。そして何よりも難しいのが研究費の調達である。川竹先生はそれらの困難を、異能ともいえる、すさまじいエネルギーで一つひとつ克服していかれた。

各国のテレビ番組の具体的調査から、国際コミュニケーションにおけるイメージ・ギャップ、パーセプション・ギャップが明確にえがき出された。国際コミュニケーションの研究に新しい局面が開かれた。というよりも、テレビ時代にふさわしい調査研究のスタイルがつくられ、そして実際に大きな成果があがったとすべきだろう。

諸外国の研究活力が衰えたのに反比例して、先生主催の日本チームはますます活力をました。最初の日米仏から日英、日韓タイ、日比、日独と、国際共同研究は日本主導

(実は川竹主導)ですすんでいった。そして先生は今あげた国の他、日本製テレビ番組を輸入しているイタリー、香港、マレーシア、ブラジル等との共同研究を準備中である。

以上の調査研究の一部はすでに、『テレビの中の外国文化』(NHK 出版協会)、『ニッポンのイメージ』(NHK ブックス)、『異文化の中のニッポン』(二季出版)にまとめられているが、はじめに言ったとおり、これからおまとめになるに違いない調査報告書、研究論文は量的にも質的にもそれらを上回ることになると予測される。川竹先生は、今も現在進行形だと断ずる所以である。

人の心を開かせずにはおかない先生のお酒。周囲に対するこまやかな心配り、気づかい。若手がネをあげるほどの手まめ・足まめ・筆まめ加減。無から有を生ずる変幻きわまりない研究費調達パワー。一つひとつのテーマをこなしてゆく恐るべきエネルギー、スタミナ。

川竹先生がNHKにおられた十数年前、私は先生の念願の一つであった「テレビ報道研究会」に加えていただいたときから、ずうっと先生の異能としかいいようのないキャラクター・人間性に接してきた。しかし、いまだに先生の異能を十分に説明できないでいる。そこで、というのは我ながら理屈にあわないが、先生のご経歴を辿ってみたい。

1924年11月17日、京都で誕生。小学校4年まで京都。5・6年は徳島。中学は大阪の天王寺中学校。岡山の旧制第六高等学校に進学。同級生に政治家安倍晋太郎(故人)、三井物産社長熊谷直彦らがいた。六高在学中の44年学徒出陣、海軍航空隊に属し、海軍少尉で敗戦。その間に無試験で六高を卒業し、東京帝国大学仏文科に入学。辰野隆教授のすすめで美学科に転じ、卒論では音楽美学(パレストリーナ)を扱った。

東大板橋学寮で江崎令於奈、升見純之介、神谷不二男らと、のち東大YMCAに移ってからは森有正、木下順二らと交る。50年NHKに入り、放送記者。そのころの不規則不節制な生活が先生の強靱な体質をつくったのかもしれない。60年、キャスターニュースのフォーマットをつくる。64年、東京オリンピックのニュース担当。その後、外報部主管、コンピュータ・システム、放送センター建設委員会、研究開発委員会、放送文化基金、放送文化研究所を経て世論調査所長。NHK生活は32年間に及んだ。

東短では教養科に属し、情報文化論と国際コミュニケーション論を担当、文理学部の国際コミュニケーション論を兼任された。講義とゼミのほか、すすんでさまざまな委員、委員長をつとめ、とくに現代文化学部設立準備委員としては縦横に活躍された。

1988年現代文化学部発足。コミュニケーション学科教授。研究エネルギーいよいよ高まる。講義・ゼミとも学生の人気最高だったが、ゼミ学生数が多く指導がゆき届かぬことを、いつも悔んでおられた。

1993年3月、定年を迎えられ、稲城市に新設の駒沢女子大学人文学部国際文化学科の教授に転ぜられた。猿谷要、秋山虔の両先生は川竹先生と行をとともにされ、専任の教授。東女教員が数多く非常勤講師として駒沢女子大に動員されたのは、いうまでもなく川竹ネットワークである。

最後に、コミュニケーション学科教員一同の深い感謝の念を川竹先生に捧げます。